

〈ひらかれた生〉を求めて

—— 森崎和江の言説にみる共生への模索について ——

小林 瑞乃

〈要旨〉

本稿は、植民地朝鮮で育った森崎和江（1927-）の戦後の言説について、1970年代後半を中心に検討したものである。敗戦によって日本で生きざるをえなくなり、「女・民族・日帝時代の朝鮮育ち」という自己の「条件」を痛感することになった。それを引き受けた後の生き方は、「日本の女」としての自分を模索し悪戦苦闘した苦悶に満ちている。日本社会の諸問題に直面し、女であるがゆえの抑圧や差別のみならず、底辺労働者や離島からの移民、各地を転々とする流民などに共感をよせ、植民者二世としての原罪意識を背景に、「異なる他者」と共に生きるべく独自の思索を生み出している。

森崎の思想の全体像の検証を視野に置きつつ、本稿では特に「女であること」を軸に据えた。それは、十代の「近代的自我」形成のただ中であつた森崎が、敗戦と思春期とが重なるなかで自己の内部の「近代」と「反近代」の混在に気付き、その自己意識を突き詰め、さらなる自己へと脱却していく過程であつた。炭鉱夫やからゆきさんとの出会いの中で「女の闇」を実感していく、その具体的なあり様から森崎の言説の意義を追った。

キーワード：言葉・女であること・植民者二世・自己解放・ひらかれた生

はじめに

混迷を深める現代社会を考える上で、私が最も重要だと思う人物の一人が森崎和江である。1927年生まれ森崎は、日本の植民地であつた朝鮮で生まれ育ち、敗戦直前に日本に渡り、「おくにナショナリズム」など強い嫌悪や違和感を感じる日本で、日本の女とは何かを見つめ、自分を生き直そうともがき苦しんだ。植民二世としての原罪に苦しみながら日本社会の支配や差別の構造を抉り、様々な人間の諸相を描き出している。

私は、拙稿「戦後思想史における森崎和江」（『年報日本現代史』18号、2013年5月）で、〈対観念〉と〈いのち〉を軸に森崎の生き方と思想の全体像を辿った。性愛・妊娠・出産といった女であることの諸相を語り、男女の関係性をめぐる〈対観念〉を追求し、〈産〉

の思想化を訴え、〈いのち〉の言説へと結実していく歩みを追った。本稿では引き続き、思想的総決算の時期ともいえる1970年代を中心に、具体的にどのように自己や女たちと向きあったのかを焦点に、女であることと自己回復とが交錯する中で深化していく言説を検討する。というのも、「共生」という言葉が一般化するよりはるか以前に、森崎は既にその道筋を見つめていたからである。

1 女たちの戦後

「敗戦は私に心の自然さをかえしてくれた。なにひとつ見えなくとも、少女である自分の感性のまにまに感じとり、判断し、苦しみ、主題を持ち、外界のどのような権威も必要とすることなく自分で解きあかそうとする心を抱いておれることは、しんしんとする山中にいるように確かな手ごたえのあるものであった。(中略) 信頼に足るのは自分のなかにもった灯火だけであること。この実感は焼け落ちている市街を、引揚げによる無一物と結核の熱と、そして少女という未知数とをかかえつつ歩く時、まことに燃え石のようにあつかった。」¹⁾

戦争が「男の特権」であった戦時中、「無用」のものとされていた少女にとって、敗戦という「既成の権威の失墜」は自由への解放を意味した。それからの三十年を振り返り、森崎は次のように言う²⁾。敗戦によって、参政権、売春禁止法による人身売買の禁止、労働基準法による母体保護といった「女の人権」の「たてまえ」は確立した。そして女たちは「そのたてまえを女の実感に引きよせつつ実質化させようと」してきた。大まかにいえば、敗戦直後の十年間は「諸権利に関する制度や組織づくり」に費やされ、労働組合の婦人部や政党内外の組織や話し合いの場などが生まれた。次の十年は「母たちの歴史といったものを、女みずからの内部をさかのぼりつつたずねる作業」が展開した。生活記録運動や母親大会などもそれにつながる。つまりは組織や制度に頼らずとも「内発する泉が、ながい性差別の期間も枯れることなくつづいているはずだという、潜在する自己への直感的なとりくみが行われたのである」。

例えば、紡績やデパート、漁村や農村、炭坑や市街で「草の根のような小集団」が生まれ、「女たちの主体性に関する感覚的な自問が、個々に、あるいは集団内部に、または女性史自体へ問われ、外部からの概念づけをはみ出しはじめた期間であった」。そして森崎自身は、「かかえきれぬほどの命題にじっとり汗ばみながら、幾人もの人を愛し愛され、子供を生み、育て、女性集団をつくってガリ切りにあけくれ」ていた。

さらに、その後の十年間は「見かけ倒しのつよさよりも夕やけの空のようなエロスへと、その強靱さを収斂しはじめた」「感覚的認識の論理化の期間」であった。それは新左翼系の女性運動から「無原則な性の遊戯」を含む幅広い動きであり、「いずれも自己の行為に対する論理的傾向」がともなっていたのは、「戦後からのたどたどしい足どりの当然の過程」であった。さらに、「戦後教育で育った少女たち」が「実感で得ていた性の同権意識」

を己れの肉体で、また「対社会的な現実の上で開花させようとする動き」も加わった。そして森崎も、「体験によってつかんだものを、やはり人並みに自分で噛みしめ社会化する楽しさを、かけがえのないものとして愛した」。

男尊女卑の日本社会は女性を様々に抑圧していたから、解放と自由を手にして、女性たちが堰を切るように自らの道を求めてさまよいだしたのは当然すぎることであった。それは、一人の女として、男たちとの新たな関係性の模索でもあった。そうした戦後の歩みにあって、森崎の生き方が他者と異なった位相を示すのは、植民者二世としての原罪意識であったといえよう。

植民地で生まれ自己生成の途上にあった森崎は、日本ではその植民地体験によって「閉ざされる」苦しみを味わった。「愛してくれる男」の「愛の言葉」も「皮膚のうえをすべりころがるばかり」で「閉ざされている私の、内なる私」へ届かない。反対に「私が男へ、あなたが好きです、といおうとしても、男のからだの奥から立ちのぼる、何か日本くさいものを、私の内に育っている朝鮮への愛や罪意識が激しく拒否する」のだった。「植民地体験つまりは日本と朝鮮の歴史に対してどのように向うのか」、その答えを探さぬかぎりは「たった一人の日本の男も、しんそこから抱けない」自分を感じていたのである³⁾。

2 存在と言葉と

朝鮮では周囲は若い日本人の核家族ばかりであったから、森崎は同世代の中で自己の道を模索しそれに責任をもてばよいという生活であった。しかし、敗戦と思春期が重なり、「私の条件―女・日本人・日帝時代の朝鮮育ち―」を受けいれざるを得なくなった。

「戦争に負けてはじめて個体としても民族としてもその意識の故郷を求めて。また親世代の個体史がはらんでいた苦悩を引き継ぎたいと思うようになった。そこには近代と前近代とが拮抗していた。」⁴⁾ (傍点引用者)

日本で生きるのは極めて苦痛なことだった。植民地での自己形成が日本での確かな自己の前提になることはなく、むしろ宙吊りのような苦しさであった。からだが動かなくなり「話し言葉」も出なくなり、「完全な失語状態」になって、その時残ったものは「書き言葉だけ」だったという⁵⁾。だが、「書き言葉の中に込められている概念」や社会的通念、感性といったものにひっかかりを感じ、「それらを全部ばらばらにして」「音素みたいなものにもどして」、「自分の心身の感応にちかいものに組み直さなければ」「自分の言葉」にならなかった。ともかく書き言葉にすがって、「外側にあるいろんな言葉を借りて、自分と言葉、あるいは、自分が日本で生きなければならない事実」を「観念させよう」としてきた⁶⁾。つまり、書き言葉の「抽象性」が自分と日本とをつなぐ「媒体」となっていた⁷⁾。

しかし、「言葉でもってものを考え、伝えあう人間たちは、言葉にさえ性を反映」して、「女の疎外」を強く感じさせられた⁸⁾。特に思考用語は「男たちの感性」に沿っていて抵抗があった。例えば「自己」という言葉を用いて討論をしていながらぴたりと添わない「不

十分な思い」がつきまとった。「女をまっすぐに表わそうとすればするほど」その感じは深まっていく。社会がありがたのまの女を受けいれていない圧迫、またどこへも結びつかない苦しさの中で、「日本という社会の盲点と、女というくらやみ」を、同時に受けとめるほかなかったのだ⁹⁾。

存在・性と言葉をめぐるこうした葛藤は、子を産んで益々深くなる。「私は子どもを生んだ」ということと「子どもは生まれた」ということ。それを「自己統一的に体験した」が、「その体験の特殊性つまり『生む』と『生まれる』の統一の実体をあらわす言葉の欠如」に愕然とした。「女としての存在を表現する言葉のなさ」を痛感し、それでもなお「言葉に依拠」して生き、言葉に「女性の刻印」を押したいと思った¹⁰⁾。

書き言葉にすがるしかなかったというが、「一番基本に流れている」のは身体による表現、全身的に表現したいという思いであった¹¹⁾。言葉は肉体そのものであった。

だから、女学校の、乳房がふくらみかけてきた頃、それまで好きだった妹弟への寝物語ができなくなった。身体的変化にともなって「だんだん変っていつている自分」と「変らない自分」とがひとつにならず、「その関係」も言葉にならず、やむなく「論理的につかめる部分に近寄った」のだという。古事記や論理学とか「結婚の生態というものを読んで叱られたり」とか「色々と乱読し続け」ながら、「だんだん変る自分と、変らない自分とをひとまとめにして、人に伝える為のとっかかり」を必死に探していたのである¹²⁾。

だからこそ、「感性の中」に「日常生活の様々な他人」や風物などが「自分とかかわりつつ這入り来んで来て、自分にとって大切な言葉になる、その根っこあたり」が大事だと思うのだろう。人と会うことが好きな森崎は「一人一人の中に」その「歴史」や「生きてきた姿」や「大切な言葉」といったものが「独特のひびき」をもっていることを愛する¹³⁾。言葉は存在そのものであり、「私は私にも使用可能な言葉を武器に使いつつ言葉と存在との関係の回復を計らんとする」¹⁴⁾。

「肉体の言語化を阻まれている苦痛」¹⁵⁾を実感するがゆえに、森崎は労働者の声が理解できた。「言葉を生活する」労働者は、「言葉は敵だ」という。それは反権力的思考にもまつわっている「言葉は支配力である」という通念に対し、「言葉は肉体そのものだ」という反発なのである¹⁶⁾。「思弁の対象」となることを拒否し、「労働（生活）の現場の歴史と分離した言葉を機能的に使うことを拒否する」¹⁷⁾。「言葉は拮抗しあう具体性をぬきにするならば簡単に天にもものぼるし革命をも夢想するもの」だからである¹⁸⁾。

ある労働者は、「わたしら階級の運動はどうあるべきかを、自分の言葉と行為で確立したい」と語った。さらに、「自分の言葉を持つ、ということは、自分個体の代々の歴史を背負って立つ、ということだ。自分は与論島から強制的に三池へ移住させられた集団の中の子孫の一人である。与論の心を本土の階級闘争の中に定着させたい」と。対して学生や自称活動家や新左翼らの背負った歴史は浅く、労働者の実態も知らずに概念操作ばかりで何も見えていない。つまりは「日本社会の固有な歪みに無智だということである」。「個体史の歪み」を内に抱えずに、「外側にある個々の歴史をつまみぐいする」から、ある時は

朝鮮問題、ある時は沖縄問題と渡り歩けるのだ¹⁹⁾。

とはいえ、労働者といえども「言語信仰から自由でない」。というのは、「言葉を社会的に占有する者への怒り」だけにとどまり、言葉自体に「自己の欠落」を重ねてはいないのだ。女の欠落は、より深刻である。「私たちは言葉を言葉一般として持つわけではなく、民族語として持ちあう」。そして、「支配権力の原理」でゆがませられてきた結果、「女の根底」はとらえがたく「言葉のかげら」すら与えられていない。しかし「人は、人のままに言葉を持つ権利」がある。

しかし、「こうした欠落の主張」は「まだ部分的にすぎる」と、森崎は痛感させられた。再会した韓国の旧友らの語った「思考用語」である。彼等は「日本語だけで生活させられたはずみ」をその精神に深く宿らせ、「幼少期の諸体験の思想化」で「朝鮮の魂」をよみがえらせんとしながら、その手段に日本語が使われる「心的操作」や、あるいは「日本語生活」の体験が「朝鮮語そのものに陰影をおとしている事実」を「文字表現に生かしつつ」それを「朝鮮民族性の強固さの証しとしている人らもいた」。

旧友らは「魂と言葉との関連性の上に刻みつけられた傷」は、その「裏返しのような形で刻みつけている元植民者との共同作業」で「越え得るものだ」と言った。元植民者二世として朝鮮民族によって養われた森崎の感覚を「かなり正確に知っている」彼等は、「両民族の心の傷は個々別々に解決し得るものではない」というのだった²⁰⁾。

言葉と存在のあり様に試行錯誤し、逃れようのない自己の「条件」を突きつけられながら、その思索は広がり深まっていった。森崎は、存在も言葉も思想も一つに連なって捉えているようだ。言葉の性差別にみる「女」、社会や国家と闘っているはずの運動内部における支配や権力の実態、安易な概念操作から置き去られている者たちの存在を伝えていた。筑豊の大正炭坑闘争後、労働者が分断され流砂のように散って、敗北の痛みが骨身に達して惨憺たる状況の彼等の近くに森崎はいた。「貧労」という造語が照射しえない在日朝鮮人、日本語しか話せない地元の在日中国人や三池の与論人夫たち。「これら伝承すべき定着すべき歴史を労働者の資産として受けとめたい。解放は自分自身に立つこと」だからと言う²¹⁾。森崎は「感覚的認識の言葉化はたたかいへの不可欠の条件だと」論じた²²⁾。「私」という一人称の崩壊感覚を生んだ、その根本にある実存的感覚は深く鋭い。森崎と言葉を考える時、ともすれば一面的な理解に終わってしまうことを、改めて自戒したい。

3 女の暗闇

森崎が結婚を決意したのは、敗戦から七年後の1952年であった。その報告をした時の父の表情に、「おまえもやっぱりそれで終るのか……」という声を読み取った。父は「手がとどかぬほどのものに向きあっていないと、女は駄目になる。仕事だけは一生はなさないようにしなさい」といった。この時の対話は父娘のあり様を物語っていて印象的である。「父は見ぬいていたようでした。私が何が何だかわからないまま、途方にくれて、たった

ひとりの人を相手にして性の平等を築き、そこから社会との手がかりをつかもうとしはじめ、「その心の傾斜のどこかには敗北感がにじんでいる、と」²³⁾。

見ぬかれているという思いとともに、森崎は父とのひそかな違いに気づいていく。

「私はこうして自分のあしあとをふりかえっているのですが、この父と私との無言のやりとり、私は、ありのままの自分を生かす道はふさがれていると感じる女と、そう感じることはない男とのちがいがひそんでいるのを感じます。『女の分際』をおしつけなかった父は、そうして育てたから大丈夫だと思っていたかもしれません。与謝野晶子を好きな側面を持っていましたから、あのような仕事と家庭の両立を考えていたのかもしれませんが、私は社会的な仕事もするし、家庭の主婦でもあるというスーパーぶり、女の不自由さを解くことができるとは考えられませんでした。」²⁴⁾

自分だけではなく「女たちぜんぶが落ち込んでいる状態」を取り除きたいと森崎は思った。「女のくらやみへ向って降りていくこと、それだけが『仕事』であるかのように」、そのやみを夫と「夫が代表している社会へ」伝えようとした²⁵⁾。「自分が感じている解放への出口がどこにも見当らないので」、そうする以外なかった。「性的差別をのりこえてなお人々は、性が原理的に他の集団原理とは異なった質をもつ点を、文化の実質にかかわる部分で考慮せねばならないと感じた」からである²⁶⁾。

しかし、女の「やみ」は想像以上に凄惨な事実を突きつけた。中でも最も受け入れがたい出来事が、「からゆきさん」であったヨシの死である。理解しがたい思いが胸の奥に未消化のまま横たわっていたが、それは自身の女性解放思想が根底から問われていたのであった。ヨシは家中を磨き上げ、全てを処分し、死体処理のための準備までしていた。この「自分の死に対する完璧な始末」に衝撃を受け、「私はヨシが好きになるにつれて、心の中で彼女をなじった。なぜ野垂れ死をなさらなかったのですか。自分のむくろなど他人や自然のなすがままにまかせるのが、一番美しいのに」と²⁷⁾。

「からゆきさん」を「白首」と呼んで差別する社会と闘って「自立者として生き」たヨシは「たたかいがなくなってきた肉体を自覚し」「自ら訣別」していた。そこには「自立へ向かうたたかいはたたかってきた女だけが聞きとるような、痛切な声がひびいていたのである。『自立しがたい者との共存を、いまわたしは語る』と」²⁸⁾。

しかし森崎の「感性」は、それに強く反発していた。それは論理や思想といったものではなく、より深いところで感じる反発だった。ヨシの「自己像への執着」に、「意識的存在でありたいという欲望にしがみつくのはみっともない」と心は叫んでしまう。

「意識が及びかねる肉体の条件をひっさげたまま生きたい。乳のみ児がものごころつくまでの自分を他の手にゆだねて恥じないように、その逆をたどりつつ野たれ死するまでの人間のすべてを、なぜたのしめないのだろうか。たたかいとった自己像が、肉体のおとろえとともにくずれ、人々の目にさらされ、その誤解のなかへ朽ちていく。野たれ死とはそのようなもので、存在とはもともと、そうした半面をふくむものなのだ。女性解放には、その存在の矛盾を矛盾のまま生かしめる自由もふくまれる……。」²⁹⁾

乳幼児に保育所を高齢者に老人ホームといったように「疑似社会」を与え、結局は「活動的年齢層ばかり」が活動する運動のあり様に何とかせねばと思ってはいた。それ以上に、ヨシは「民衆とは悲惨なものだという小市民的視線とたたかった女のひとり」として「地底の女のきらきらする抵抗力と結びあう存在」であり、「愛する民衆像」として身近な女性だった。

しかし、感性的反発は自分でもなだめようがなかった。「生い立ちが形成してきた感性」からどうしても「自在」になれないためだった。「売られも買われもせず、侵されも捨てられもせず、自律おぼつかない仔兎のころから自立の日のためにと保護されつつ育った感覚が、彼女の死にざまを彼女の『欲』としてしか受けとめない」のだ。「その死にざまは彼女の涙だったはずである。悲しみであり、挫折であり、怒りであり、生まれそうもない共存社会への、問いかけだった」³⁰⁾。

それを「みっともない！」と受けつけぬ自己の女性解放意識の「欠落部分」を見たのである。そして、自分の感性が「たとえば若者宿や娘宿のルールを『野蛮な風習』と切り捨てた明治の記者の近代性と、どれほど違うというのだろう」³¹⁾と自問自答した。また、自己の「近代性」への問いは、森崎自身をより根源から揺さぶるものであった。「野垂れ死」を理想とするのは「自分を自分以外のものへ委ねる姿」を当たり前の前提にしている。「持ちつ持たれつ生きている人間たちの死の象徴」、あるいは「大きな自然の抱擁の中で消えていく姿」ともいえる。その背景には、生命誕生と、乳飲み子が丸ごと他者に依存せずには生きられないという「産み」をめぐる驚嘆と発見があった。しかし、そんな前提を奪われた者から、「自律することが困難な者との共存はどうあればいい？ 自律から社会的自立へと向かって生きようとしているとき」³²⁾と突きつけられたのだ。

「私は久しくヨシについて書くことができなかった。彼女の死は、彼女の沈黙のことばのように、大きく重く、私を圧迫し続けた（中略）数年がたった。あるとき彼女へ語りかけていて、はっとひびくものがあった。それは十九歳のヨシのかなしみであったかもしれない。心と体とを自分以外のものへ委ねあうという、性愛のやさしさを奪われた少女の、伝えようもない悲哀が、足もとに用意された消毒綿や消毒薬や洗面器となって浮かびあがった。自然に対してさえ、心身を委ねかねているように思われた。私の心はふるえた。私はヨシに書かせられてでもいるように、ヨシの生涯を書き始めた。彼女が伝えたがっていた人々へ向かって……。』³³⁾

売春婦にされ弄ばれた自分を取り返そうと体を張った自立の生活が肉体的に不可能になって、死を選んだヨシ。自分を他者に委ねるしかなくなった時、その「他者」とは誰なのか。当たり前のように委ねる感覚を抱けなくされた〈棄民〉の生涯。その死に直面し、長い葛藤を経て、生きるとは「前後に広がる時空」を思想化し他者と「共存」しながら「自己を越えること」だと論じたのであった³⁴⁾。

『からゆきさん』を読むと、「女の闇」を受けとめようとした森崎の苦しみを思う。刃物で心を切り裂き血の涙を流すように苦しんだ年月。森崎の日常生活は、実はこうしたこと

の繰り返しではなかったかと思わずにはいられない。ヨシの死に方に悶え苦しみ、自己の近代的感性と対峙し別れようとした森崎の苦闘の重みと意味とを、私は受けとめたい。

4 母たちの「贈り物」

「ありのままの女」について自問自答し、言葉や行為でそれを男たちへ伝えようとしていた森崎を根本から揺さぶったもう一方の存在が、元坑内夫であった。人権などないに等しい納屋制度下で「男女の人格の対等さを体験し、共に制度に抵抗して生まれた自己認識は、実力を伴うのでまことにのびのびとあかるい」。彼女たちは「人間と人間との勝負じゃ。そう思えば恐いもんは、なか。りくつと尻の穴はひとつばい。男も女も、役人も坑夫もりくつに区別はあるもんかね」と言い、実行もする。「指導者があるでなく、組織もなく、文盲で、世上のことにうとく、リンチが横行した納屋制度下でこうした意識を生活上の常識のように身につけた女たち」を尊く思った。大半は農村出身者で、幼いときに両親に連れられ流れてきた。以来「労働のきびしさに体当たり」し、「苛酷な労働がその意識をきたえあげたとしかいいようがない。そしてその苛酷さを共に堪えあう仲間意識が」³⁵⁾。

性愛と労働が結びついてこそ人間にとって最高の状態だという思いで生きぬいていた。

「炭坑の人々は、性をたのしいものと認識することで、地上の差別感や、資本の圧力をはねかえしつつ人間性の尊厳をたたかいてきました。ことに、坑内労働をした女たちにはそうでした。いのちがけの地下労働は、愛しあう時に感ずる充足感で切りぬけていけるので、愛と労働の一致を求めて男から男へと、求めつつ働きました。」³⁶⁾

彼女たちは「性愛と労働の一致を存在回復の核心にすえて、地上では想像もつかない地下労働を男とともに体験してきて」いた。だが、文字化もされていないその経験は次の世代へ伝えられず、「ひとりひとりの心の中」だけで終わろうとしていた。この「母たちの貴重な体験を死なせたくないと思っている娘世代が」まだ炭鉱には残っていたが、「それをつかみとるひまもなく」「女らしくあるべきだという考え方がひろがろうとしていた」³⁷⁾。「戦後の小市民的な暮らし方」が炭坑にも波及して、「性愛のよろこびは労働を共にする楽しさと断ち切れ」「三食昼寝つきの身分が最高」と思われるようになり「性は働くこととは結びつかぬところで消費されがち」になってきていた³⁸⁾。

母たちの経験をどう思想化するのか。それは森崎自身の課題でもあった。15歳の頃、死にゆく母に子守唄を歌いながら、若い日の母やその一生、さらに祖母や曾祖母が見えてくるという体験をした。

「子を負い育ててきた無数の女の像と、その無言の文化が、死にゆく母の枕もとで、広い河のように見えてきたのです。私はまだ少女でしたが、これは女として母が私へ贈ってくれた贈り物なのだと知りました。何かたいへんに広い、深い流れを感じました。母を同性として強く感じました。」³⁹⁾

しかし長い間、その「贈り物」を位置づけられずにいた。女に押し付けられた様々な概

念を拒絶し、「自分の感性だけ」を基準に生きてきた。幾度も恋をし性愛にゆさぶられ、男をいとしく思いつつ、また自身を「いとしく思い」「自分を育てること」にも全力を注いできた⁴⁰⁾。しかし何も見えず、ただもがくばかりで、また、「母たち」をも「見えなくさせられている」ことにさみしさを感じていた。ただ、それは社会や権力のせいばかりでなく、自分の生い立ちがそうさせている。つまり「生活の実感からかなり離れたところ」で生まれ育ち「文字文化のかたわら」で成長して、母たちが手渡そうとしていたものを自ら「拒否」し続けている自分を感じてもいた⁴¹⁾。

炭坑町ではヤマの女たちが「むんむん湧き出すような人くささのなか」で、森崎を「どんとこいとばかり」に受けとめた⁴²⁾。「ながい強烈なヤマの被圧迫下で生きた女たち」は意識化されずに埋もれたままの大事なものを抱えて右往左往する彼女を丸ごと抱きとめてくれたという実感でもあった。彼女たちが、母たちの「贈り物」への回路を開く力となったと私は思う。

「おそらくそれまでの女性の歴史にも、このヤマの女たちのように、書物にも残されず社会的権力からも遠いが、しかし、人間にとっての基本的な意識を生みつつ伝えてきた人々が無数にいたにちがいない。それが私たちの意識にのぼらず、被害者的側面ばかりを女性史としてきたのは何故なのだろう。私にはそれは文字文化にたずさわっていた階層によって、女や女の歴史がとらえられてきた結果のように思えてくる。」⁴³⁾

女性解放の先達は「人権無視の状況から女たちを解き放つために尽力」し、支配権力と対決して「苦痛をなめてきた」のだから、「女性史が被害史」となるのは「当然」である。しかし、被圧迫下の女たちは「ただどれいの涙で生きた」のか。ヤマの女たちは「特別すぐれて」いたのか。もしも、「いきいきと生きていた女性の呼吸」が感じとれるようなすべを得たならば、「今日の女性解放意識が」「規範とも力とも基礎ともすることができるのではなからうか」⁴⁴⁾。様々な問いは女性解放意識一般というより自身のそれを自らに問うもののように思われる。両親の庇護のもとに近代的自我を育て、またそれ故に閉ざされてもいた地点から脱して、森崎はようやく〈母たち〉を見出していったのである。

いつの世も女たちは「自分を知ろうとしていた」が、あの子守唄の体験のように「直感的にその伝統を受けつぐほかにすべがない」。だから、文学にも社会的な働きにもならず、母から娘へ家事を通して「無言のうちに」伝えられていた。女たちの伝承と社会との間にある「深い谷」。それを森崎自身が踏み越えたのだった。

「社会の側から見ると、まるで何もないかのように見えます。私自身そう見えて、どんなに長いこと苦しんだか知れません。母からあのようにありありと何かしら底深く大きな贈り物をもらいながら、学校などで得た知識と結びつかぬばかりか、邪魔にさえなってきます。私は母たちとの別れこそ大事だと思ったりしました。このごろはあの流れにひそんでいたものを、ことばにして世の中に送り出したいと思うようになりました。また私自身、あの女たちの流れにしっかりと根をおろしていきたいと考えます。」⁴⁵⁾

5 孤独な闘い

現代は、多くの無名の女たちが「内的なたたかい」を甘受している。それは「自分」という「つかみようのないしろもの」とである。

「幼稚園からずっと、自分のことは自分でしなさい、と育てられ、自分用の部屋をあてがわれ、その子ども部屋で自分をみつけだす旅に出ているのです。男の愛を受けたからといって、そのとたんに、自分発見の旅が終わるはずもないのです。どうすればいい。だれも教えてくれません。だれも助けてくれない。私は、両親にしんから感謝していますが、それは、このだれも助けようのない孤独のたたかいを、この世でもっとも甘美な生の核心として受けるように育ててくれたからです。」⁴⁶⁾

森崎のもとにさまよってくる若い人たちに感じるのは、「自分自身の根っこになるたったひとつの言葉、これがわたし、という一人称の根もとにひろがる手ざわり」、「そういうものが、うまく出来ない苦痛」を持っていることだという⁴⁷⁾。女たちの多くは、見えない砂からもがき出ようと傷ついている。

「彼女たちは何もない砂にうもれ、必死に自分を生かそうとしています。自分が生きてはじめて、男を生かすことができる、と、そう思うからにはかなりません。そしてひとりひとり、やはり水で書いた絵のようなものを心に抱いています。」⁴⁸⁾

さらにいえば、「古代から歴史の主体になることのなかった女たち」がこの数十年で「自分のことは自分で」と、考え行動し始めたばかりなのだ。「そのささやかな動きは、口にするや溶け失せる初雪のようで、あげつらうにはいとしすぎる」⁴⁹⁾。男と異なるこの歴史性の違い、自分を語ることに不慣れな中で悪戦苦闘する全ての女性の姿が、森崎には尊いのだ。

「私が同性に対して冷淡になれないのは、女たちの内的なたたかいがどんなに稚拙であろうとも、それは男たちのような伝統などないところでもがいている姿であるからです。そしてその稚拙なものがきき、いくつもいくつも集まることだけが、この私をも助けてくれることになるからなのです。たとえその試行錯誤が中途半端で終わろうとも、または、ばかばかしい空さわぎであろうとも冷ややかに見ることはできません。(中略) 女たちの内的なたたかいが、公然と世の中へ語り出されて何らかの形をとるようになったのは、ついこのごろのことなのです。今から道づくりをするのです」⁵⁰⁾

森崎が願うのは、女たちが個体史を持ちよって互いの「歴史性」を確認しあい、女(自分)の思想を築くことだ。二十世紀になって「ようやく体験の社会的対象化が形式的に認められ出した女たちが、普遍的用語に自己の対象化を見出せないでいる」のは当然なのである。「言葉は歴史」であり、「私たち個々の歴史を重ねることぬきに自分らの言葉を所有し得るはずはない」。「私たちの歴史」、つまり「女の歴史は集団としての歴史よりもはるかに深く、個体史が分断されたまま」である⁵¹⁾。

「それら個体史を総合し得る契機を私たち相互の歴史性の内側に発見せねばならな

い。そして今日までの言葉の歴史に新しい視点を加えてその構造のもろさと欠語とを補強しなければならない。そうでない限り私たちは女っ気ぬきの原理を『私』としたままで、私（女）の思想を構築する喜劇を重ねるだけである。女としての存在があるがままに肯定して生きる日を得たいならば、私たちは自分の個体史を私物化すべきではない。」⁵²⁾

女であることが無条件で女同士を理解することにはならない。だが、そうであればこそ、「個体史」の分断を乗り越え、女の思想とともに新たな歴史を紡ぎたいとも思う。

6 「精神をひらく」

ところで、「人間の自然性」という命題は、森崎の思索を考えるうえで重要な鍵となる。「産む」ことの思想化を念願する森崎は、妊娠調節が可能になった「女たちの性意識」を見つめた。「生むことを性の情念から切りはなす」ことができるようになり、「家族外での、家族を構成しない性愛」を可能にさせた。それが「どことなく社会を不安にさせ」るのは、「性は家族を構成するばかりでなく、それからの解放をももたらすもの」だからだ。妊娠調節は、女に「しあわせ」をもたらしつつ、また「自然な欲情」を押し殺させる。「この矛盾」からは逃げられず、もう後には引けない。ならば「産み育てることを共通の目的としない両性の性関係」について新たな「人間的な視野」が開かれねば「産み育てる家族の性」も根づいてはいかないと指摘する⁵³⁾。

「つまり家族内の性にも、産み育てる性関係ではない両性のありようが自問されねばならなくなってきました。それを不問にすることは、人間の精神の働きをにぶくしてしまいます。また、産めない男女や血縁によらぬ家族への共通感情を失わせます。なによりも家族の女の性感覚と人間的な感情とを貧しくしてしまいます」

未婚の母という問題も、その点から問われてくる。単独者の楽しさと、子産み子育ての楽しさとを味わえる未婚の母は新しい生き方として歓迎され、男女は単独者として互いの生活に踏み込まないようにつきあう。それでよいのかという思いが森崎にはある。物質生産の向上を至上課題とする社会に、男も女も単独者としてその能力を捧げている中、それに沿った生き方になってはいないか。男女の関係は物質生産の原理に従い、労働力の再生産としての出産・生誕に閉ざされてしまうならば、それを切り裂かねばならない。〈対〉へのこだわりも、これと深く関わってくる。

「女たちは、男の閉鎖性をやっつけることよりも、あやまりをおそれることなく、女を表現する道をつくりあうことで彼らを開かせたいと思います。フリーセックスも未婚の母もウーマン・リブも私のような涙っぽいたたかいも、その過程の敷石のひとつですが、なおそれをのりこえていきたいと思います。」⁵⁴⁾

人間の文明は「人はいのちを生み出す」ことを思想化しつつ成長すべきなのだ。「男性世界と女性世界」は「固有の特質を伸ばしながら」共存しなければならない。「男性世界

だけが文明であった世界のなれのはてが、今日の、人間死滅を潜在させた文化」だと思っ
からこそ「生まれた人間」から「産む人間」への過程を意識化することを訴える。それ
は「自然破壊に対する人間のたたかひの根源となる部分」であり、また家族もそれに沿っ
て変転するだろう⁵⁵⁾。

森崎は強い危機感を感じていた。それは一切を根幹から覆すような変化となり、「これ
までの動きを根底からゆさぶるようなけはい」であった。

「女たちの開放への欲求のすべては、いわば人間の自然性を肯定し、そこに立脚した
人間観に基盤をおくものであった。無原則な性の風俗であれ、ウーマンリブの戦闘性
であれ、女たちのさまざまな動きは、いずれも人間のもつ自然を不当に抑圧するもの
に対する抵抗という点では結びついていて、それは男たちの歴史が、人間のもつ自然
よりも、人間のもつ権力意志に重点がかかっていたことに対比して、特色がある。」⁵⁶⁾

しかし、「女たちの感性や論理の基盤」であった「人間の自然性」が「人間すべての内
外で破壊」されようとしている。「女たちは実感と対応する場をせばめられ、コインロッ
カーへ胎児を捨てても心も体も痛まない」。自分をいましめつつ森崎は言う、「より深く人
間たちの生体の手ざわりを文化のなかに回復させねばならない」と。そして「深化する崩
壊」へ立ち向かっていく⁵⁷⁾。

この、存在の回復、あるいは実存の〈手ざわり〉とも言い得る指摘は極めて重要である。
人は皆多くの生にかかわりを持ち他人を圧しているから、人間関係や環境を生々しい圧力
として感じる。しかし、独り善がりの生き方では自分をも閉塞させてしまう。それは母か
ら教わった。母が夫と共に「自由と解放とを子育ての中心にすえてくれたその親心」は「感
性の基盤」になり、「ひとりのひらかれた生き方は、他の人びとの人生をもひらかれたも
のとしめない限りは、ひとりよがりになるのだ」と「肝に銘じて教えてくれた」のだった。
母にとっては郷里に残して来た「老母の余生」であり、自分にとっては「朝鮮のあの人こ
の人の人生」であった⁵⁸⁾。

この「ひらかれた生き方」とは、「何かをしたい」というのとは別のものである。だが、
多くの人が「両方を混同させ」、追われるように焦っている。だから、まずは「そのちが
いに気づくことが大切」だという。

「何かをしたいという、いわば社会参加の要求は、生きてるものは何かをさせよ、と
いう社会のシステムの裏返しのように主体性を失ってきました。人びとは赤ん坊のこ
ろから、何かをするために培養されているようになってきました。何かをしなければ、
と日々私たちは追いたてられているようです。」⁵⁹⁾

大切なことを置き去りにしたまま社会に出て、生き急ぐ人々。外部の圧力や身近な他者
との間に生じる軋轢に直面して、「自分を閉ざしているのは社会や他人ではなく、子宮の
殻をかぶっている小児的精神だと」気づく必要がある。しかし「妻であり母であり女であ
る小児たち」以上に、「夫であり父であり男である小児」は多く、それは「伴侶である女
たちの新しい苦悩」となる。女の場合は、子育てをきっかけに気づく機会があるからであ

る。

「子育てから遠くで生きて社会の機構ともみくちゃになっている若い男たちは、生身の自己をとりもどす機会さえありません。自己回復は自分の生な存在をよみがえらせることであり、そのためには権力や論理はほとんど役立たないのです。」⁶⁰⁾

人は誰でもそれぞれにふさわしい「開放を求めるもの」だが、それは容易ではない。「小児性」からの脱却は親から巣立つようには簡単にいかない。「思想を持つとか、社会的な仕事をするとか、経済的独立とかいうこと」ではないのだから。また、親元にある少年少女であっても「自分をめぐる状況の認識」さえ確かなら「小児性を自力で脱して、ひらかれた生への第一段階的踏みこみ」は可能なのである⁶¹⁾。

この、「自分の意識で自分を生みだす仕事」を、森崎は「第二の誕生」と呼ぶ。それは「自立した人生の戸口」であり、「小児性への別れ」である⁶²⁾。「この小児性からきっぱりと巣立っている人びとの、ひらかれた生の求め方は」十人十色であり、「いいようもない苦悩を織りこんで生まれている」、その「すばらしさ」。

「すばらしさとは何か事を成したということではありません。人格の完成や成熟でもありません。むしろまだ弱々しく、まるで小児さながらです。その歴史もまだ短く、つい先日第二の生誕を終えたばかりのような少女もいます。その生き方について書きようもないほどそれはごく普通です。まだどのような形も持たず、ただ混沌があるばかりです。けれども彼女たちは、結婚してもみずからの混沌を手放しません。それが緊張できらめいています。ある時は絶望でみるもむざんにゆがんでいます。」⁶³⁾

「人間の自然性」とともに、自己を生きぬくために必要なことは、「精神をひらく」という終わりのない「孤独なたたかい」だ。誰かが「手出し」をすると「思春期病の子や小児的夫妻をつくり自らを閉ざし」てしまう。

「妻が何かを見つけることを夫は見守る。夫がそのたたかをやめぬことを妻はじっと見守る。また、子が孤独につよくなることを、たがいに、じっと見守ります。肉親であろうとも、触れてはならぬ、あるいは触れることは不可能な精神の発光地があります。それに対する愛。(中略)そのような精神の深い淵が、妻にも母にもあり、夫にも子にもあることを、さりげない日々の共同のくらしに十分に感じ、感動を注ぐことです」⁶⁴⁾

「第二の誕生」は、新たな家族の関係性をも示唆しているといえないだろうか。

おわりに

敗戦による解放で心に燃え立つ炎と自分の感性だけを頼りに歩み始めた森崎は、日本社会と人々を見つめ、その言葉と行為によって人間存在の根源を問い続けた。戦中の強い「統制」を経た後の新たな生き方の模索は、人間の尊厳を回復しつつ「異なる他者」と共に歩む道筋を照らしていた。「共生」という言葉が一般化する、はるか以前のことである。

言葉は存在そのものであり、肉体の変化と性と労働や民族といった「個体史」の歪みを内に抱え、また他者との相互性が折り重なってそれぞれに独特な響きを持ちながら生きる姿を反映する。単なる記号としてではなく、様々な拘束から言葉をも解放とうとするかのような言説に、自身を「言葉を思考して未来を開かんとする者」⁶⁵⁾とするのも頷ける。

また、森崎は「女たちのぜんぶ」を解放するため、その「やみ」を見つめようとした。「女であること」を生きる手がかりにしようとしたのである。そして、「からゆきさん」や炭坑夫といった誰も見向きもしなかった女性たちとの強烈な出逢いがあり、激しい自己との対決や葛藤があった。そうして自分の中の「近代」と「反近代」を感受し、近代的感性を剔抉し、母たちの「贈り物」を手にしたのである。それは例えて言うならば、“父の娘”から“母の娘”として、脈々と続く「女たちの流れ」に根を下ろしていく道行であった⁶⁶⁾。自分は流れ者の系譜にあると論じるようになるのも、この頃からである。

深い溝や不安の中で傷つけあい苦悩しつつ、相手の根源にある大切なものを把握しあう充足感、存在の「手ざわり」を感じあうこと。この「手ざわり」を私たちはほとんど意識したことがない。しかし、それは実存の根、人間という存在を確かなものにするだろう。誰もが自己の「条件」を生きざるを得ない。だが、「自分を越え」新たな自己を生きることができると、森崎は言う。一人一人の「孤独のたたかい」が、その基盤となるはずである。植民地育ち・日本人・女という「条件」に苦しんだその軌跡は、自分を生かし他者と生きるための道筋を示している。

1970年代の言説において、既に森崎は生殖技術発展の功罪を見据え、〈産む／生まれる〉事実が受けとめられずに〈(生まれた)人間〉の自然性が剥奪され、生産力増強に寄与させられてはならないと訴えていた。それは、人が生きることの社会的意義を功利主義や経済発展が吸い取っていくという構造的な危機だといえよう。人間が生命を〈産む／生まれる〉という事実を自覚し思想化することが、人間存在を利益追求に屈服させないためにも不可欠なのである。自己回復の原点も、またそこにある。遺伝子研究等の飛躍的發展によって生命誕生が以前にも増して男女の性愛を不要とする現在、森崎の言説は一層深刻さを増す日本社会に不可欠な警鐘となっている。「共生」を考える時、最も重要な思想家だとしたゆえんである。

註

- 1) 「女たちの戦後三十年と私」『さんいち』74年11月(『産小屋日記』三一書房、1979年、243頁、以下『産小屋』と記す)。本稿で特に本書に注目したのは、近代化とともに失われた素朴な人間観を過去の女たちの息づかいの中に見出そうとする一冊だからである。
- 2) 同上、243～245頁。
- 3) 「ひらかれた日々へ」『婦人公論』76年6月号(『産小屋』247～248頁)。
- 4) 「死者のことばと私」『思想の科学』74年10月(『産小屋』79頁)。
- 5) 「わたしと言葉」『暗河』76年夏号(『産小屋』109頁)。

- 6) 同前、114頁。
- 7) 同前、118頁。
- 8) 「性のやさしさを」(『産小屋』190頁)。
- 9) 同前、180～181頁。
- 10) 「言葉・この欠落」(『異族の原基』大和書房、1971年、216～217頁、以下『異族』と記す)。
- 11) 前掲「わたしと言葉」(『産小屋』107頁)。
- 12) 同前、111頁。
- 13) 同前、117～118頁。
- 14) 前掲「言葉・この欠落」(『異族』217頁)。
- 15) 同前、215頁。
- 16) 同前、213～214頁。
- 17) 同前、218頁。
- 18) 同前、220頁。
- 19) 「貧劣階級の敵とは何か」(『異族』248～249頁)。
- 20) 前掲「言葉・この欠落」(『異族』222～223頁)。
- 21) 前掲「貧劣階級の敵とは何か」(『異族』249頁)。
- 22) 前掲「言葉・この欠落」(『異族』221頁)。
- 23) 前掲「性のやさしさを」(『産小屋』、182頁)。
- 24) 同前、182～183頁。
- 25) 同前。
- 26) 同前、184頁。
- 27) 「心のなかの対話」高校国語〔現国〕学校図書1975年(『産小屋』67～68頁)。
- 28) 前掲「死者のことばと私」(『産小屋』84～85頁)。
- 29) 同前、85頁。
- 30) 同前、86頁。
- 31) 同前、87頁。
- 32) 同前、83頁。
- 33) 前掲「心のなかの対話」(『産小屋』68頁)。『からゆきさん』は編集者とやりとりによって「はじめて自分の話し言葉の感性のなかから、自分のそとにいる他人にむかって書こうとした本」であり、「やっと自然なかたちで、自分のなかのふたつの言葉たちが出逢ったもの」という。書下ろしはそれまでとはまったくちがった文体となった。それまでは「自分をつかまえるために書いていた」。「からゆきの女たちはわたしには、日本と、日本のそとのくにの人たちとの、からだをかけた媒介者のように思えます」と述べている(前掲「わたしと言葉」参照)。「からゆきさん」やテキヤなど村に住めず自分の芸や身を売って「人々に、何かを伝えていこうとしながら生きた歴史がいたい」とする森崎は、彼らの中に自分を見出したのだろう。
- 34) 前掲「死者のことばと私」(『産小屋』87～88頁)。
- 35) 同前、75～76頁。
- 36) 前掲「性のやさしさを」(『異族』198～199頁)。
- 37) 同前、188頁。
- 38) 同前、199頁。

- 39) 「女の無言をことばにしたい」『すくすく』1977年8月（『産小屋』214頁）。
- 40) 同前、214～215頁。
- 41) 前掲「死者のことばと私」（『産小屋』78頁）。
- 42) 同前、77頁。
- 43) 同前、76頁。
- 44) 同前、77頁。
- 45) 前掲「女の無言をことばにしたい」（『産小屋』217頁）。
- 46) 同前、215～216頁。
- 47) 同前、216頁。
- 48) 前掲「女の無言をことばにしたい」（『産小屋』217頁）。
- 49) 前掲「女たちの戦後三十年と私」（『産小屋』246頁）。
- 50) 前掲「女の無言をことばにしたい」（『産小屋』216頁）。
- 51) 前掲「言葉・この欠落」（『産小屋』218～219頁）。
- 52) 同前、219頁。
- 53) 「女の性と家族」『ベビーエイジ』1977年12月号（『産小屋』231～232頁）。性について森崎は、「政治からの自立と解放を要求し得るだけの内容をはらむもの」だと述べ、「それほどの尊厳を人々の属性としての性に感じとらぬかぎり」、性は、また「産む者としての女性の性」は「政治的支配の力に左右されつづけることでしょう」と論じている（前掲「性のやさしさを」『産小屋』201頁）。
- 54) 前掲「性のやさしさを」（『産小屋』195頁）。
- 55) 同前、200～201頁。
- 56) 前掲「女たちの戦後三十年と私」（『産小屋』246頁）。
- 57) 同前。
- 58) 「ひらかれた日々へ」（『産小屋』250頁）。
- 59) 同前、252頁。
- 60) 同前、254頁。
- 61) 同前、254～255頁。
- 62) 同前、253頁。
- 63) 同前、256頁。
- 64) 同前、256～257頁。
- 65) 前掲「言葉・この欠落」（『産小屋』219頁）。
- 66) 朝鮮民族への敬意や人間の平等を説いた思想性の高さゆえに、先行研究では森崎と父との関係や影響を重視するものが多い。しかし、森崎の思想を総体的に把えるためにも母との関係性に、私は注目したい。特に森崎の生き方・暮らし方に与えた影響は無視できない。この点を明らかにすることも本稿の目的の一つである。

Looking for New Relations: A Study on the Works of Kazue Morisaki in the 1970s

Mizuno KOBAYASHI

Kazue Morisaki is a poet and a writer. She was born 1927 in Korea as a second-generation colonist. Her parents brought her up on the laissez-faire policy against military education. She grew up an independent teenager. After World war II, she had to stay in Japan unable to leave. She faced many hardships including discrimination within the homogeneous context of Japanese society. In addition, she was opposed to patriarchal tradition and male chauvinism. At times it was a struggle to live. She groped for justification for her existence. In time she got to women with various cultural backgrounds, especially coal miners and former prostitutes. In her writing she illuminates a wide variety of aspects about women and various critical issues for the reader's consideration. She might be considered a pioneer of feminism in Japan. However, she stressed not only women's liberation, but also expressed a high esteem for the sanctity of life. She appealed to us, the readers, to carefully consider what is truly important in life in order to overcome material civilization.

I attempt to show just how thought provoking her works can be. This paper aims to carefully examine necessity for restoration of personal relationships with others in order for society to move forward in maturity. Indeed, interaction with people from different walks of life broadens our horizons, helps us develop human relational skill, and moves us more toward future-oriented egalitarian relationships.

Keywords : second-generation colonists (born and raised in former colonies), identity, discrimination and alienation, womanhood, egalitarian relationships
